

家庭問題の眼目

文學士 下田 次郎

▲社會の單位は家族 昔は社會のもとには個人であると云つて居たが、今日は社會の本となり基礎となるものは家族だと云ふ様になつた。社會の最も小さいものは個人ではなくて家族である。社會と個人、社會と家族は、後者の方が餘程よく似て居る、つまり家族が單位になつて社會が出来たのである。故に社會を發達させやうとするには、家族制度即ち家庭の發達を謀らねばならぬ。近來家庭が追々崩れて來たが、獨居獨身主義は最も忌むべきことで、甚だ悪い傾向だと思ふ。

▲家庭離散 世が文明に進めば進むほど交通機關はますます整頓して來るから、家庭の各員は離れへくになる傾向がある。父は九州に居り、兄は横須賀に居り、残りの家族のみ東京に居ると云ふ例は幾らもある、斯くの如く家族が離れへくになつて居ると、家族間相互の情愛が薄くなるのは云ふまでもない、家族の味ひを能く知らない子供は、

甚だ不幸なものであつて、父母と遠く離れて育つた子供は、恒久心の乏しいものが多い、斯様な子供が、血の冷かな情の薄い人間となるのは已むを得ないことである。昔の家庭は、常に一所に集まつて定住して居たが、今日の家庭は全然之にあやかる事が出来ぬまでも、成るべく昔のやうに一所に住むやうにしたいと思ふ。

▲故郷の印象 出來得るだけ、子供をして家庭を懐かしむる様にしたい。母の胎内から生れた子供は、家庭を以て第二の胎内と思はせるやうにした。故郷を慕ふ印象は人間に最も必要な要素である。井戸端の南天の樹、村はづれの小森など、子供の時の印象は終生忘れられぬと共に、其人の一生に偉大な感化を與へるものである。此點に於て最も都合の悪いのは都會生活である都會の子供は、少しも生れ故郷に對する愛慕の心がない。其の結果、田舎の子供は重々しいが、都會の子供は輕佻である。子供に故郷の印象を深くさせ、家庭は彼等の本執であると云ふ觀念を與へるのは、父母の最も念とすべき點である。父母に此用意がなくて

は、國民教育も學校ばかりで成績を擧げることは出來ない。

▲家庭を持つ幸ひ 人々が結婚するを見ると、

どんな暮らしをし、どんな子供を設け、どんな家庭を作らうと、初めに於て心を用ふるものが少ない。

夫婦の間には是非とも子供が必要である。子供は

父母の命を延ばし、活動の元氣を與へる。常に勞

務に在るものが、家庭に在つて子供を相手にし、

之が爲めに享くる樂しみは何れだけか知れぬ。

又人の働くのは一は國の爲めといふ點もあるが、

多くは子供の爲め、又は家を支へる爲めに働くも

のである。人間は家を持つと義務心が出るが、

家を持たないものは義務心がないから、全力を注

いで働くこと云ふことをしない。つまり男子の家庭

を持つことは、其の一身の爲め、社會の爲め大なる

幸福である。

▲家庭問題の眼目 だん／＼家庭が崩れ、獨心者

の多くなるのは、決して喜ぶべき現象ではなくて

國家の大なる呪ひ大なる不幸である。家庭を維持

するの必要と子供を育てるの必要とは、當今の家

庭問題の中で、最も先に論じ最も注意を要する大問題である。最早や西洋では餘ほど家庭が崩れて居るが、我國はまだそれ程でもない。故に我國民は、斯かる逆潮に對して大に抵抗し大に闘つて、家庭を維持せねばならぬ。

セームス、サウエル氏家庭衛生訓

- 一、一日の中八時間は睡眠に費すべし
- 二、眠る時は右側を下にすべし
- 三、終夜寢室の窓戸を開き置くべし
- 四、寢室の戸の正面には屏風を立つべし
- 五、寢室は壁より離れしむべし
- 六、毎朝體温と同温の水にて沐浴すべし
- 七、朝食前に運動を取るべし
- 八、よく煮たる少量の食物を攝取すべし
- 九、病氣の媒菌を消滅せしむる細胞を養ふ爲めに適當なる脂肪を食すべし
- 十、興奮物を用ふる勿れ、之れ前記の諸細胞を害するものなればなり
- 十一、毎日戶外運動を爲すべし
- 十二、犬猫其他の動物を室内に同居せしむべからず、此等は疾病微菌を傳へ易きものなればなり
- 十三、成るべく田舎に住むべし
- 十四、飲料水濕地下水等に注意すべし
- 十五、適宜に仕事を變ずべし
- 十六、適宜に休日設くべし
- 十七、功名心を制限すべし
- 十八、常に精神の劇動を避けよ